「日々の理科」（第 1814 号） 2019,-6,27

「シジュウカラの営巣（３）」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中　千尋　Chihiro Tanaka

シジュウカラは、巣箱を「見学」に来て、その 30 分後には即決、すぐに巣草を運び込み始めた。猛烈な勢いで運び込み、その日の夕方には、巣箱の床一面に巣草が敷き詰められた。運び込まれたものの大半は「ミズゴケ」である。山荘近くの沢や、山荘の庭の一角に大量にあるのだ。弾力があり、巣草には最適なのだろう。

もちろん夜間は巣造りはしない。しかし夏至前後で昼が長いので、「長時間労働」が可能だ。翌日の午前中には、巣草はほぼ敷き終わったようだ。メスが座っているが、これは卵を産む窪み（産座）の位置を確かめているのだろう。営巣を急いだのは、すでにメスのおなかに卵ができつつあり、至急住宅が欲しかったからにちがいない。

２日後には、巣は完成した。動画で見るとよくわかるのだが、産座の上でしきりに体を回転させ、巣草が壺状に安定するように努力している。シジュウカラは誰から教わるのでもなく、こうした技術を「遺伝子」として持っているのだろう。

産卵日になると、メスが早朝に巣に入り、産座に１時間近く座っている。その後お尻と尾羽を持ち上げる動作をすると、産卵の一瞬である。

１卵目の産卵に成功した。その後１日１個ずつ産む。